

区民等との意見交換会の概要

本委員会における調査・検討に資するため、以下のとおり区民等との意見交換会を開催した。

1 開催日時

令和7年9月25日（木） 午前10時00分～午前11時00分

2 参加者

- （1）民生委員 8人
- （2）墨田区議会高齢者対策特別委員会委員 9人

3 内容・テーマ

「高齢者が抱える課題（特に終活、独居、住宅確保及び権利擁護）について」

4 意見交換会の概要

10：00 開会

①委員長あいさつ、②委員紹介【副委員長】、

③民生委員自己紹介

10：09 3グループに分かれて意見交換を実施

10：39 グループごとにどのような意見があったかを発表

10：52 全体を通しての意見交換

11：00 委員長あいさつ、閉会

～ 意見交換会における主なご意見は次のとおり ～

3 グループに分かれての意見交換における主なご意見

Aグループ

- ・ 相談に乗っている方は、日々の生活に不安を感じている。
- ・ 賃貸住宅に住んでいて、建て替えによる立ち退きの相談、引っ越し先がないという相談が多い。
- ・ 社会福祉協議会が作成していたエンディングノートは、当初はセミナーもやっていたかなり人気があった。最近はあまり聞かなくなった。
- ・ 社会福祉協議会のすみだあんしんサービスは150万円の預かり金が必要ということで資産がないと使えないが、よいサービスだと思う。方向としてはよいが、ハードルが高いため、利用者数が伸び悩んでいるのではないかと。
- ・ お祝い金を配る際、元気な高齢者が多く、昼間出掛けていてお渡しするのが大変。
- ・ 高齢者を受け入れてくれている不動産屋は地域にあるが、どこから入ったらよいのかわからない物件を紹介されることもある。
- ・ 認知症高齢者が心配で、地域で活動していた方がいつのまにか家に帰れなくなる。できる限り近隣の方と共有し、声を掛けてもらっている。長年住んでいる方には、身内のように声を掛けてくれるが、他の地域から来た方には近隣の方もよくわからないので声を掛けにくい様子がある。
- ・ まちの再開発などにより、今まで歩いていた道の建物等がなくなると、曲がる場所がわからなくなり、帰れなくなるといことがある。
- ・ 誰にも気付かれずに亡くなった方については、なるべく早く発見したいと思っているが、地域とのつながりが少ない方が多く、隣に誰が住んでいるかもわからず、部屋からの異臭で発見されるということがある。
- ・ 独居高齢者のうち、病気や障害がある方はデイサービスや病院とつながりがあるからまだいいが、そういうつながりもない方のほうが心配である。
- ・ 高齢者がマンションに住んでいる場合、名簿で名前はわかるが顔がわからない。
- ・ 特に町会に入っていない人へのケアは気を付けているが、工夫が必要だと思っている。
- ・ 自分から発信できる方の状況は把握しやすいが、そうでない方については、誰がなにで困っているのかというのほうわさで聞くしかない。そういった方がいた場合、みまもり相談室と連携して対応につなげている。民生委員は貧困対策から始まったという経緯から抵抗がある方もいて、その場合は、みまもり相談室の方が対応してくれている。
- ・ お祝い金を渡す際は玄関で対応することになり、どんな家か、どのような家族かがわかり、困り事も伺うことができる。
- ・ エンディングノートについて、高齢者はまじめな方が多くしっかりと書かなければならないと考えてしまい、ボリュームがあると書くのも大変。もっと簡単に、手帳のようなものがあるとよい。名称も変えてもよいと思う。亡くなったときに知らせしてほしい人、スマホのパスワードを記載するなど、今の時代に即して工夫したものがあるとよい。

Bグループ

- ・ 高齢者の賃貸物件への入居は、不動産会社が事故物件になることを恐れて難しいと聞く。高齢者に安心して住居を貸し出せる施策が必要と思う。
- ・ 近所の高齢者が孤独死していたということがあったが、みまもり相談室が家族へ連絡をしていた。亡くなった際にどこに連絡してほしいかがヒアリングされている。
- ・ 近所の方が部屋の電気や洗濯物の状況を見て知らせてくれて、助かったという事例があった。
- ・ 最近では少なくなったが、回覧板が滞って、亡くなっていたことに気付いたという事例があった。気づくのは大変で、近所の目が大切である。
- ・ 民生委員は毎日訪問できるわけではなく、見守りが追い付かないこともある。
- ・ 高齢者でなく、高齢に近い年齢の方も持病で生活に困っている場合もあり、そういった方への支援も必要と思う。年齢にかかわらずつながりを持っていただきたい。
- ・ お祝い金を届けたときに、目が見えない方、うまく歩くことができない方がいた。みまもり相談室等の支援があることを知らない方も多い。
- ・ マンションでは表札がなく住民の把握が難しい。また、訪問を嫌がり町会にも入らない方が多い。
- ・ 公的な支援の世話になりたくない、なかなか自分から助けてほしいと言えない高齢者が多く、もう一歩踏み込んだ訪問ができるとよい。
- ・ ふれあい訪問をしても情報を漏らしたくないなどの理由で、見守りを拒否されることが多い。
- ・ 体が動かなくなるなど、本当に大変になって初めて公的なサービスを受けることが多い。
- ・ 高齢者が抱える個別の事案に対して、どこに相談したらいいかわからないということもある。
- ・ 公的機関につなぐまでが本当に大変で、本人に拒否されるとどうしようもできない。
- ・ 比較的若い人のほうがなにかあったときに自分で調べて連絡する。
- ・ 高齢者は初めて支援を受けるまで羞恥心があるのだろうと思う。支援を受け始めるとなくなる。
- ・ 小・中学校の朝の登校時の見守りなどをやっている元気高齢者が様々なところで活躍できる場があるとよい。
- ・ 高齢者の集まりへの男性の参加は女性に比べて少ない。男性のみを対象とした体操教室などもあるが、初めて参加するまでがなかなか難しい。一度参加すれば毎回参加する。

Cグループ

- ・ 終活は、高齢になって、体がうまく動かなくなると考え始めることが多い。
- ・ 本人が死後の整理をしていて、亡くなった方の遺族がほとんど困ることがなかったという事例があった。一方で、どういう生活しているのか想像も付かない方も多くいる。
- ・ 地域性があり、北部と南部で生活が異なるように思う。
- ・ 担当する地域には都営住宅があり、そこに賃貸住宅に住めなくなった方、独居になった

方が入っている。

- ・ 北部では地域の方から高齢者の情報が入ってきやすいように思う。
- ・ 特別養護老人ホーム等に入れば生活状況もわかるので安心。一方、生活保護を受給する世帯も結構ある。財産も多くないので、独居がほとんどだが、孤立死がよくある。
- ・ お祝い金を渡すために訪問すると、生活状況や健康状態等、色々な話を聞くことができる。高齢者対策として非常に重要。この事業をやめないでほしい。
- ・ マンションにお住まいの高齢者は、当初はあまり交流をしたくない様子だが、70歳を過ぎてくると徐々に交流したいという雰囲気を感じる。
- ・ 高齢者の多くが、いかに最後まで在宅で生きていけるかを考えている。
- ・ 長年地域のマンションに住んでいた方は、これまで会社員だったので関わりがなかったが、サロンを開いたところ、高齢になってきて寂しくなって、来るようになった。施設に入ろうと思っているけれども、地域とつながりができたら在宅で過ごせるのではないかという意見があった。
- ・ これまで住んでいた住居を退去しなければならなくなった方が、年齢を理由に引っ越しができなかったということがあった。結局、住み慣れた地域から出ていかなければならなくなったが、高齢になってから別の地域に住んでコミュニティをつくるのは難しいのではないかと思う。
- ・ 都営住宅や民間賃貸住宅への転居が難しい場合、生活保護を受給することもある。
- ・ 女性は割と様々な集まりに出てくるが、男性はなかなか難しい。
- ・ 男性が参加したくなるようなイベントを設定したりと工夫をしている。
- ・ 女性が元気なのは自分から動いて、いろいろな仕事をやっているからだと思う。高齢者がなにか役割をもって仕事ができる、イベントに参加できるとよい。
- ・ 高齢者が増えているのに老人クラブの数が減っている。その理由として管理運営が難しいということもあると思うので、少し若い世代がサポートするなど、老人クラブの活動を継続し、人が集められるサイクルをつくらないと衰退してしまう。